OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〔史料紹介〕『ミレール地図帳』所収の「ブラジル地図」(1519年)について
Author(s)	東, 明彦
Citation	ブラジル研究. 2014, 10, p. 73-83
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106581
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

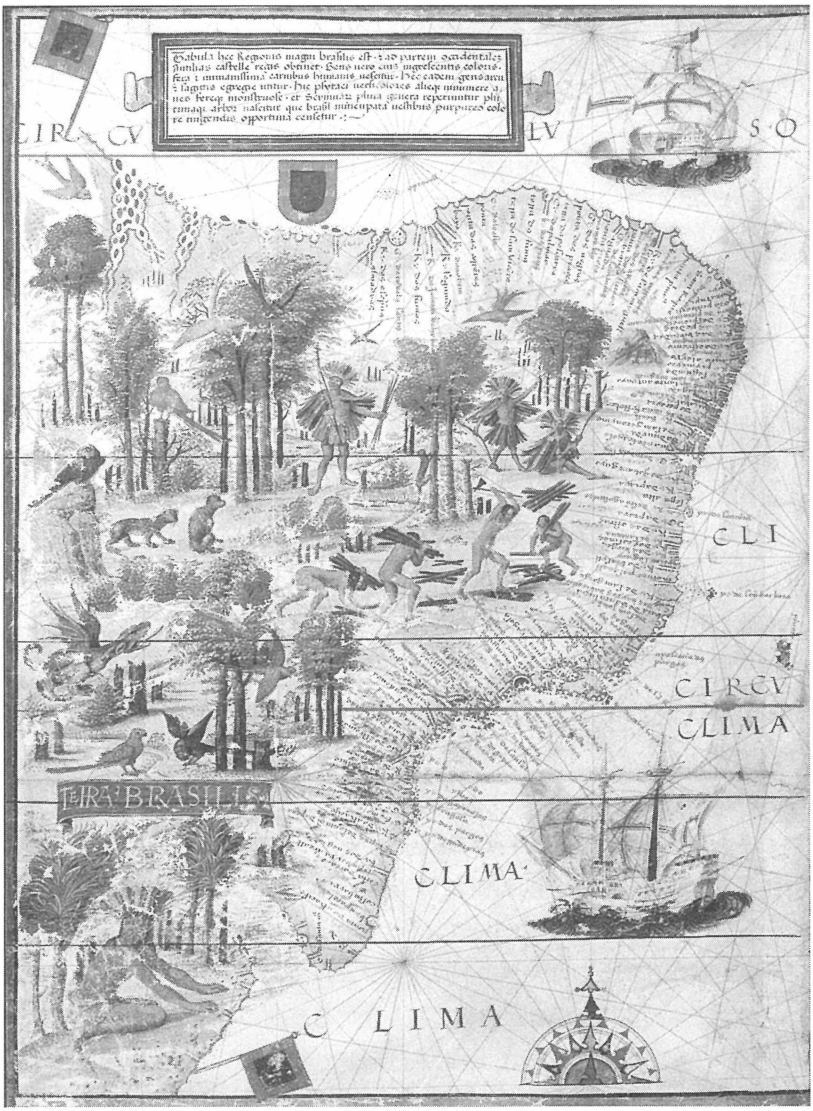
［史料紹介］『ミレール地図帳』所収の「ブラジル地図」（1519年）について[1]

東　明彦

はじめに

本稿で取り上げる「ブラジル地図」（羊皮紙、42cm x 59cm）は、1897年以降パリ国立図書館所蔵の『ミレール地図帳』（1519年）[2]に収められている8点の地図の一つである（inv. n° Rés. Ge DD683, f.4）。ポルトガル王室の地図制作者[3]ロポ・オーメン（生没年不詳）が制作の中心的な役割を担ったと考えられている。ただし、ポルトガル人地図制作者ペドロ・レイネル、ジョルジェ・レイネル父子（ともに生没年不詳）も制作に関与した可能性がある。[4]地図の内陸部分を埋める美しい彩色画は、アントニオ・デ・オランダ作と考えられている。[5]

地図が制作されたのは、ポルトガル人フェルナン・デ・マガリャンイスがスペイン王室の支援を受け、世界周航を企てる直前のことであり、地図制作の政治的な意図を考える上で、この点は重要である。



『ミレール地図帳』所収「ブラジル地図」（部分）

Max Justo Guedes, *O Descobrimento do Brasil*, CTT Correios de Portugal, 2000, p. 73.

1.『ミレール地図帳』所収「ブラジル地図」

ブラジルが描かれた 16 世紀初頭の地図としては、「カンティーノ(Cantino)の地図」(エステンセ図書館所蔵[モデナ]、1502 年、羊皮紙、105cm x 220 cm)が知られている。この地図には、当時ブラジルを表象する際に頻繁に用いられたオウムが 3 羽描かれている。また、クンストマン II と呼ばれる平面図(1503-1504 年)は、内陸部の部分に、これも当時のブラジルの代表的な表象であった「人喰い」の情景(褐色の膚の先住民が、膚の色が白い人間をたき火で焼いている情景)が描かれている。この平面図では、海岸線の地形は、相当明瞭に描かれ、代表的な地形には名称が付されている。

一方、『ミレール地図帳』所収の「ブラジル地図」の描写をまとめると次の点が重要である。

(1)海岸線は、ブラジル北部から南部にいたるまで、従来の地図とは比較にならないほど詳細に描かれ、146 の地名が記載されている。

(2)内陸部には、11 羽の色とりどりの鳥とサルやヒョウなど 4 匹の獣(うち 1 匹は明らかに空想上の獣であるドラゴン)が描かれている。

(3)羽根飾りを身に着けた 4 人の先住民が描かれ、うち 3 人は弓矢を携えている。

(4)上記の羽根飾りを身に着けた 4 人の先住民以外に、ブラジル木(パウ・ブラジル=赤色染料木)の伐採に携わる 4 人の先住民が描かれ、うち 1 人は鉄製の斧を振り上げ、ブラジル木を切り倒しており、他の 3 人は、ブラジル木を運搬している。

(5)アマゾン川河口(左岸)とラプラタ川河口(右岸)には、それぞれポルトガル国旗が立っている。ラプラタ川の河口は、特に肥大して描かれる。[6]

2.『ミレール地図帳』所収「ブラジル地図」の特徴

「ブラジル地図」の特徴として、以下の点が指摘できる。

(1) 16 世紀前半の地図は、沿岸部の探索を目的とし、主として航海図としての役割を担っていたため、海岸部の描写は、一般に明瞭である。一方、内陸部

については、実質上、情報がなく、地図としては空白となり、その部分を彩色挿絵などが埋めた。[7]「ブラジル地図」は、その意味で 16 世紀前半の地図の典型であった。アマゾン川（マラニャン川）からラプラタ川にいたる海岸線の描写はそれまでの地図と比較にならないほど詳細であり、一方、内陸部を埋める彩色挿絵は、色彩豊かで、芸術作品の域に達している。

(2)当時、ブラジルは、「オオムの土地」という名称で呼ばれた。リスボンのイタリア商人は、この「オオムの土地」という表現を好んだ。コンゴウインコがヨーロッパにもたらされると、人々は、その大きさとあざやかな色彩に驚いたといわれるが、このあたりの事情は、カンティーノの地図にも、「ブラジル地図」にも反映し、両者において、色鮮やかなコンゴウインコはブラジルを表象する重要なモチーフとして描かれている。[8]

(3)『ミラー地図帳』の「ブラジル地図」の大きな特徴は、色彩豊かなコンゴウインコやサルとならんで、染料木（ブラジル木）を伐採・切断している先住民が描かれている点である。生態学的な観点からは、ブラジルの森林とその伐採を描写した最初の地図として興味深い。

「ブラジル地図」において、翼のあるドラゴンが描かれているところなどは、空想的なブラジル像の反映であるが、純然たる自然の描写の他に、ブラジルの風物として羽根飾りを身につけた先住民の姿が描かれ、さらに「労働する」4 人の先住民の姿が地図に描かれているのは、注目に価する。この 4 人は、芯の赤いブラジル木を伐採し、それを運べる長さの丸太に加工している。一人が鉄製の斧を振り上げている姿は、この地図が「最初の経済地図」[9]などと称されるゆえんである。

1500 年ペドロ・アルバレス・カブラールがブラジルに到達し、1549 年にブラジルに総督府が設置されるまでの期間（つまり、植民地時代ブラジルの主要産業となる砂糖生産が開始されるまでの期間）、ブラジルとの交易で経済的な価値を有したのは、染料木であった。ブラジル木の伐採や海岸部の交易拠

点（商館）への運搬には、先住民労働力が利用された。先住民労働力の利用には、主として「物々交換」の手法が利用された。

本図に見られる鉄製の斧は、先住民が、ブラジル木の伐採や運搬という労働の対価として入手したもので、それは、焼き畑農業の前提である森林伐採にきわめて有用であった。鉄製の斧は、ヨーロッパ人と先住民の二つの文明の違いを端的に表象しており、先住民よる鉄製の斧の使用は、両者の邂逅を象徴する重要な歴史上の出来事と捉えられた。[10]

(4)この地図を地政学的な観点から考察すると、以下の点が注意を引く。この地図には、上述のように 146 に上る沿岸部の地勢・形状の名称が記載されており、北東部パルナイバ川周辺から、南東部リオ・デ・ジャネイロのフリオ岬周辺までの部分は、形状にせよ、方向にせよ、当時としてはかなり正確であった。[11]ところが、ブラジルの全体の形状を見るとかなりの変形が見られる。具体的には、北部のアマゾン川河口（デルタ）から東側の海岸線、および南部のフリオ岬（リオ・デ・ジャネイロ）とサンタマリア岬（プンタ・デル・エステ岬）の間の海岸線が歪曲され、東側に大きく突き出ている。

このような歪曲は、ジャイメ・コルテザンやアルフレド・ピニェイロ・マルケスらの歴史家によると、おそらくは、公式な命令を受けて行われた意図的なものであった。（地図の制作者ロポ・オメンは、ポルトガル王室の地図制作者であったことを思い起こす必要がある。）この地図の目的の一つは、偽りの情報を流すことにあったという。[12]

「ブラジル地図」には、アマゾン川河口の左岸とラプラタ川河口の右岸に自国の領土であることを示す 2 本のポルトガルの国旗が描かれている。当時のポルトガルの狙いは、南米大陸全体がポルトガル領であると主張できない以上、その主要部分を確保すること、つまりアマゾン川の河口とラプラタ川の河口を結んだ線の東側をポルトガル領と主張することであった。具体的には、ポルトガル・スペイン間のトルデシーリャス条約（1494 年）の規定（すなわち、アフリカ西岸のヴェルデ岬諸島の西 370 レグアを通る子午線の西側

をスペインの勢力圏、東側をポルトガルの勢力圏とした規定）に基づき、当該領域をポルトガル領と主張することであった。しかし、実際には、アマゾン川の河口とラプラタ川の河口は、同一の子午線上にはなかった。[13]そこで、同一の子午線上に位置しない二つの大河の河口（実際には、アマゾン川の河口は、ラ・プラタ川の河口よりも、経度で約 10 度分、東にある。）を同じ子午線上に配置することを意図した。その結果、ブラジルの北部海岸部は、東寄りに大きく張り出し、ブラジルの南の海岸もそれに合わせるような形で東に張り出して描かれることになった。

ここで注意すべきことは、当時、新しい地理上の知識を有してきたのは、ポルトガルであったことである。そのため、スペインやイタリア、フランス、ドイツにいたるまで、ポルトガルで制作された地図の影響が見られた。[14]制作する地図に偽りの情報を仕込むことは、その意味で、十分大きな効果をもった。

なお、アルフレド・ピニェイロ・マルケスによると、ロポ・オメンが同じ時期に制作した「世界図」を念頭に置くと、一連の意図的な歪曲を含む地図の制作には、もう一つの意図があったという。[15]

一連の地図の制作（1519 年）は、フェルナン・デ・マガリャンイスがスペイン王室の支援を受け世界周航を企てる直前のことであった。当時、地理上の未解決の問題の一つは、アメリカ大陸の南端を通過し、大西洋から太平洋に航海することが可能かどうかということであった。アルフレド・ピニェイロ・マルケスによると、ロポ・オーメンが制作した一連の地図は、レオノール（スペイン国王カルロス 5 世の姉、1518 年にマヌエル 1 世と結婚）へ贈るためのものであり、その寄贈の隠された目的は、レオノールを通して、アメリカ大陸南端は周航できないことをスペイン王室に伝えることであったという。確かに、ロポ・オーメンの「世界図」では、南米の南端は、アジアと繋がり、大西洋とインド洋は、「内海」として描かれていた。

3.「ブラジル地図」に付された説明文

「ブラジル地図」の左側上部の枠内には、次のような趣旨の説明文が付されている。

「これは大ブラジル地方の地図で、この地方は、西の部分でカスティーリャ王が領有するアンティーリャス［注：ここでは、南米大陸北部を指す。］と境を接している。しかし、この地方の人々は、褐色の肌をしており、獰猛かつ野蛮であり、人肉を食する。またこの地の人々は、きわめて巧みに弓矢を操る。この地には、いろとりどりのオウム、その他数多くの鳥、怪獣のような野獣、多くの種類の猿が生息しているほか、ブラジルと呼ばれる木が自生しており、それは衣服を赤色に染めるのに適している。」[16]

この説明文には、当時のヨーロッパ人がブラジルに対して描いていたブラジル像が圧縮されている。

「ブラジル地図」に描かれた先住民像は、牧歌的に見える部分もあるが、説明文を併せて見ると、そこに描かれている先住民は、「獰猛かつ野蛮」な存在であり、けっして、彼らが汚れのない「純真無垢」な自然状態にいることを表すものではなかった。「人肉を食する」という先住民像は、上述のクンストマンⅡと呼ばれる平面図（1503-1504年）に限らず、さまざまな場面に登場し、政治的にはのちに「先住民奴隷制」を正当化する有力な論拠となった。[17]

おわりに

ポルトガルの発見航海事業によって得られた情報は、機密事項として取り扱われた。例えば、駐スペイン、ヴェネチア大使ドメニコ・ピザーニの秘書、アンジェロ・トレヴィザンは、1500年のカブラルの航海に関して、その「航海図」など漏らすと死罪となるとの情報を伝えている。[18]

しかし、1516年頃、スペイン船がアルゼンチンに進出すると、ポルトガル王室は、一部方針を変更し、上述のように、領土確保のための情報操作を意

図した。本稿で取り上げた『ミレール地図帳』所収の「ブラジル地図」は、そのような観点から見ると興味深い。美しい彩色地図の背後には、(1)トルデシーリャス条約の境界線を意図的に歪曲し、可能な限り大きな領土をポルトガル領として確保する、(2)可能な限り、コロンブス以来の西航によるアジアへの到達の企てを阻止する、という意図が潜んでいたと考えられるのである。

注

[1] 本稿は、歴史学研究会編『世界史史料7 南北アメリカ先住民の世界から一九世紀まで』、岩波書店、2008、第7巻「51.パウ・ブラジルの伐採（一六世紀前半）」(pp. 105-107)の「解説」として執筆した原稿の参考資料等にもとづき、紙幅等の関係で「解説」に掲載できなかった情報を補い、注記を付し、大幅な加筆・修正を加えたものである。ただ、そのため上掲書の「解説」と本稿には、一部内容や論旨に重複する部分がある。

[2] 『ミレール地図帳』という呼称は、地図帳の元所有者エマニュエル・ミレール(Emmanuel Miller, 1812?-1886年）の名前に由来している。なお、エマニュエル・ミレールの前の所有者は、古地図の専門家サンタレン子爵であった。

[3] Jaime Cortesão, *Os Descobrimentos Portugueses*, IV volume, Lisboa: Livros Horizonte, 3ª edição, 1981, p. 1123.

[4] ペドロ・レイネル、ジョルジェ・レイネル父子は、アフリカ系ポルトガル人で、「ネグロ［黒人］」と呼ばれていたという。Alfredo Pinheiro Marques, "Contra-Informação Geopolítica Oferecida ao Olhar do Príncipe (ou da Princesa): O *Atlas Miller* e os Descobrimentos (1519)", http://www.moleiro.com/pt/atlas-e-mapas/atlas-miller.html, 6/9］

『ミレール地図帳』の地図は、一人の地図制作者が単独で制作したものではなく、いわゆる「工房」で制作された作品であった。シマンカス文書館で発見した史料から「1523年、ロポ・オメンには、ネグロと呼ばれていた助手がいた」こと知られている。Cortesão, *Os Descobrimentos Portugueses*, p. 1122.

A.Kammerer, "La Mappemonde Lopo Homem et L'AtlasMiller", Reprinted from *The Geographical Journal,* vol. XCIV (94), no. 6, December 1939, pp. 483-492.のNoteには、1939年6月パリで開催された会議において、当時の学会関係者が、ロポ・オメン『世界図』が本物であること、および『ミレール地図帳』の制作者がロポ・オメンであることを確認したことが記載されている。この会議については、参加の一人であったジャイメ・コルテザンも、著書の中で言及している。Cortesão, *Os Descobrimentos Portugueses*, pp. 1120-1122.

[5] ポルトガルの歴史家アルマンド・コルテザン(Armando Cortesão)は、1519年のロポ・

オメンおよびレイネル(Lopo Homem–Reinéis)の「ブラジル地図」は、ポルトガルのマヌエル1世がフランスのフランソア1世に贈呈するために制作させたもので、装飾画家は、おそらくグレゴリオ・ロペス(Gregório Lopes)であろう、と述べている。Armando Cortesão, *Cartografia Portuguesa Antiga*, Lisboa: Comissão Executiva das Comemorações do Quinto Centenário da Morte do Infante D. Henrique, 1960, p. 121. ただし、制作の目的についても、装飾画家についても、異論がある。装飾画家については、現在では一般に、アントニオ・デ・オランダ（António de Holanda）と考えられている。

[6] Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos portugueses, *Brasil-brasis, cousas notáveis e espantosas (A Construção de Brasil, 1500-1825)*, Lisboa, 2000, p. 83.

「ブラジル地図」においても、アマゾン川やラプラタ川が大きく目立つように描かれているが、アルフレド・ピニェイロ・マルケスによると、このような傾向は、16世紀後半になるとさらに顕著となる。ブラジル内陸部に、「ラゴア・エウパナ」、もしくは「ドウラド」という名前の湖が描かれ、ブラジルは、湖から流れ出るパラグアイ川、パラ川（トカンティンス川）、あるいはアマゾン川（マラニャン川）に囲まれる「大きな島」のようなを存在として描写されるようになる。

なお、ブラジル内陸部の湖は、まったくの空想の産物であったわけではなく、ブラジル内陸部の沼地「パンタナール」などの存在が反映した可能性がある。
Alfredo Pinheiro Marques, "A cartografia do Brasil no século XVI", *Revista da Universidade de Coimbra*, vol. XXXIV, 1988, pp. 447-462, p. 457.

[7] Marques, "A cartografia do Brasil ...", p. 448, p. 454.

[8] ちなみに、ブラジルという名称自体は、14、15世紀の古地図にすでに見られる。ブラジルという名称は、brasa（つまり、真っ赤におこった炭火、おき）に由来し、古地図に現れるブラジルの名称は、火山島の噴火に関連していると考えられる。Moacyr Soares Pereira, "Rio d Brasil", *Revista da Universidade de Coimbra*, vol.XXXIV, 1988, pp. 417-430, p. 417.

一方、「ブラジルの土地」という表現（この場合のブラジルは、当時、高い経済的な価値をもった染料木パウ・ブラジルに由来すると考えられる）は、1505年ドゥアルテ・パシェコ・ペレイラ『エズメラルド・デ・シトゥ・オルビス』(*Esmeraldo de Situ Orbis*) が初出の可能性が高いが、それ以後、1511年のブレトア号の記録にも、ブラジルの名称は現れ、1513年9月6日付けの国王マヌエルからスペインのカトリック王フェルナンド5世宛の書簡にも、「われわれのブラジルの土地」(nossa terra do Brasyl) という表記が見られる。*Mapa: Imagens da Formação Territorial Brasileira / Pesquisa, textos e seleção cartográfica de Isa Adonias: fotografias e organização de Bruno Furrer: versão para inglês, H.Sabrina Gledhill: versão para o espanhol, Gloria Rodríguez*, Rio de Janeiro: Fundação Odebrecht Emílio, 1993, p. 49.

[9] *Mapa: Imagens da Formação Territorial Brasileira...*, p.49

[10] Cortesão, *Os Descobrimentos Portugueses*, p. 1119.

このほか、火器、つまり鉄砲も、先住民にとってきわめて魅力的な道具であったが、鉄砲を先住民に渡すことについては、ポルトガル人の警戒心が大きく、このようなポ

ルトガル人と先住民の思惑・利害の相異が「物々交換」の手法が廃れ、「先住民奴隷制」へ移行する一つの要因となった。

[11] *Mapa: Imagens da Formação Territorial Brasileira...*, p.49; *Cortesão, Os Descobrimentos Portugueses*, p. 1123.

[12] Marques, "Contra-Informação Geopolítica ...", 6/9; Cortesão, *Os Descobrimentos Portugueses*, p. 1123.

[13] 参考までに、アマゾン川河口の都市ベレンとラ・プラタ川河口の都市ブエノス・アイレスの経度を挙げると、それぞれ、西経48度30分14秒および西経58度22分55秒となる。

[14] Marques, "A cartografia do Brasil...", p. 450、p. 452.

[15] Marques, "Contra-Informação Geopolítica ...", 4//9-7/9.

[16] Cortesão, *Os Descobrimentos Portugueses*, p. 1125.（拙訳）歴史学研究会編『世界史史料7南北アメリカ先住民の世界から一九世紀まで』第7巻「51.パウ・ブラジルの伐採（一六世紀前半）」p. 105。原文は、ラテン語であるが、訳文の作成には、そのポルトガル語訳を参照した。

[17] ブラジルを扱う当時の地図や図版には、食人の光景が頻繁に描かれた。上述の地図クンストマンII (Duarte Leite, *História dos Descobrimentos*, Volume II, Lisboa, 1962, pp.248-249 所収)、さらに、ヴェスプッチの航海記（1501-1502年）の挿絵が代表例である。(John Hemming, *Red Gold, The Conquest of the Brazilian Indians*, London, Macmillan London Limited, 1978, p. ix にある Illustration 6 の説明文参照）［ヴェスプッチの航海記用と考えられる挿絵の背景にはポルトガル船が描かれ、当該の土地がブラジルであることを暗示している。『ミレール地図帳』所収の「ブラジル地図」と同じく、羽根飾りをつけた裸体のインディオが描かれている。図版を子細に見ると、天井の梁からは、人間の四肢や首がぶらさがり、インディオの中には、人間の腕にかみついている者がいることが分かる。］(落合一泰「東方の驚異、ワイルド・マン、インディアン、グリーザー－近代西欧＜民族人類学＞によるアメリカ大陸の＜占有＞－」(岩波講座文化人類学第1巻『新たな人間の発見』、岩波書店、1997、pp.141-180) pp.150-151 参照。)
なお、大平秀一氏によると、「16 世紀末期から江戸時代初期（およそ 1640 年代）にかけて、日本人によって制作された『南蛮系世界図』」の「ブラジルの図には、一貫してカニバリズムと関連した光景が示されて」いる。大平秀一「日本における南アメリカ認識の形成－16 世紀～江戸末期－」、日本ラテンアメリカ学会、『ラテンアメリカ研究年報』(No.23, 2003, pp.31-58), p.32.

[18] Cortesão, *Os Descobrimentos Portugueses*, p. 1112.

参考文献

大平秀一「日本における南アメリカ認識の形成－16 世紀～江戸末期－」、日本ラテンアメリカ学会、『ラテンアメリカ研究年報』(No.23), 2003, pp.31-58。

落合一泰「東方の驚異、ワイルド・マン、インディアン、グリーザー－近代西欧＜民族人類学＞によるアメリカ大陸の＜占有＞－」（岩波講座文化人類学第 1 巻『新たな人間の発見』、岩波書店、1997、pp.141-180。

歴史学研究会編『世界史史料 7 南北アメリカ先住民の世界から一九世紀まで』、岩波書店、2008、第 7 巻「51.パウ・ブラジルの伐採（一六世紀前半）」pp. 105-107。

Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos portugueses, *Brasil-brasis, cousas notáveis e espantosas (A Construção de Brasil, 1500-1825)*, Lisboa, 2000.

Cortesão, Armando, *Cartografia Portuguesa Antiga*, Lisboa: Comissão Executiva das Comemorações do Quinto Centenário da Morte do Infante D. Henrique, 1960.

Cortesão, Jaime, *Os Descobrimentos Portugueses*, IV volume, Lisboa: Livros Horizonte, 3a. edição, 1981.

Hemming, John, *Red Gold, The Conquest of the Brazilian Indians*, London, Macmillan London Limited, 1978.

Kammerer, A., "La Mappemonde Lopo Homem et L'AtlasMiller", Reprinted from *The Geographical Journal*, vol. XCIV (94), no. 6, December 1939.

Leite, Duarte, *História dos Descobrimentos*, Volume II, Lisboa, 1962.

Mapa: Imagens da Formação Territorial Brasileira / Pesquisa, textos e seleção cartográfica de Isa Adonias: fotografias e organização de Bruno Furrer: versão para inglês, H.Sabrina Gledhill: versão para o espanhol, Gloria Rodríguez, Rio de Janeiro: Fundação Odebrecht Emílio, 1993.

Marques, Alfredo Pinheiro, "A cartografia do Brasil no século XVI", *Revista da Universidade de Coimbra*, vol. XXXIV, 1988, pp. 447-462.

Marques, Alfredo Pinheiro, "Contra-Informação Geopolítica Oferecida ao Olhar do Príncipe (ou da Princesa): O Atlas Miller e os Descobrimentos (1519)", http://www.moleiro.com/pt/atlas-e-mapas/atlas-miller.html.

Pereira, Moacyr Soares, "Rio d Brasil", *Revista da Universidade de Coimbra*, vol. XXXIV, 1988, pp. 417-430.